

第一問 左は、筒井淳也『仕事と家族』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

変わらない特徴と変わる特徴

「日本というのはどういう国か」と聞かれたとき、どういう答えがありうるだろうか。

まずは地理的特徴である。日本は島国で、山が多くて平野が少ない国だ。イギリスや大陸ヨーロッパ北部の国々に旅行して長距離列車に乗るとわかるが、とにかく山がない。なだらかな平野が延々と続き、緑豊かな田園風景が視界に広がる。デンマークにいたっては、一番高いところでなんと一七〇メートルほどしかない。一方、日本はとでもこぼこした国だ。新幹線に乗ると、やたらとトンネルをくぐることになる。山と山のあいだの狭い平野に人々がひしめき合って暮らし、都心部では緑地も少ない。そのせいか、街なかの風景はどこかゴミゴミしている（他の国と比べて格段にゴミは落ちていないのだが）。

社会科学的には、土地や気^⑦コウなど、ある国の地理的な特徴は「^A個体特性」といわれる。「たいていのことでは変化しないその国の個性」といった意味である。国の民族構成や共通言語、宗教なども、短期的にはそれほど大きく変化しないので、個体特性として考えられることがある。個体特性は変化しにくいから、その国の特徴として頻繁に言及されるのである。アメリカは国土が広く、多民族国家だ、といった描写もそうだろう。

これに対して、政治家や研究者が問題にするのは、むしろその国の変化する特性についてである。なぜかといえば、おいそれとは変わらないことについてあれこれ議論しても社会はよくなるからだ。では、変化する特性にはどういったものがあるだろうか。

経済発展の度合い、年齢別の人口構成、社会保障のジユウ^⑧実度などはわかりやすい変化だ。都市化も各国が経験してきた大きな変化の一つである。一〇〇年前には、これほど多くの人々が都市に住むようになるとは考えられていなかっただろう。そして、

つい三〇年ほど前の日本は他の先進国と比べて高齢者の少ない「若い」国であった。それが今や、先進国のなかでも突出した超高齢化社会に変わった。これほど急激に高齢化が進むことも、多くの人々にとって想定外だったかもしれない。

このように社会の変化には様々な側面があるが、現在の社会学者の多くは、「国のかたち」を大きく変えてきたおおもとの変化は「工業化」であると考えている。そこでごくごく短くだが、工業化を軸として現在の経済先進国が経験した社会変動を記述してみよう。現在の私たちにとっての「仕事と家族」の特徴を理解するためにも、ある程度長期の歴史を踏まえておくことは必須である。

工業化と経済格差

一八世紀のイギリスで始まった産業革命を機に各国で急速に工業化が進み、主にヨーロッパとアメリカで大規模な社会変動を引き起こすことになった。工業化といっても、すでに身近な場所から工場がなくなってしまった人たちは漠然とした印象しか持てないかもしれない。少なくとも初期において、工業化とは衣服の材料となる繊維、建造物の材料となる鉄鋼、機械や鉄道を動かすための燃料である石炭の生産が爆発的に増えていくことを指す。工業化は B、工業化が進むと社会全体の富は急激に増えていく。つまり、生活を豊かにする様々なモノや建築物がどんどん増えるのである。

しかし、すべての人がこれで豊かな生活ができるようになったわけではない。

少なくとも先行する工業国家（イギリスやフランス）において、工業化は市場の発達とともに進んだ。資金やモノ、サービスの取引の場である市場が整備されることは、工業化を強力に推し進める動因となった。特に企業家の資金源となった資本（株式）市場の役割は大きい。しかし他方で、富を平等にいきわたらせること、工業生産に付随する環境汚染を抑制すること、この二点については市場の得意とすることはなかった。

富の平等な分配と環境保護は現在でも、市場に任せておくとなかなか達成されない二つの社会的課題である。当時、特に目立ったのはやはり経済格差だ。工業化の当初、人々の生活水準には著しい格差があった。工場やオフィスを所有して経営する資本家と、資本家に雇用され、工場で肉体労働に従事する労働者とのあいだに、極端な富の格差が生まれた。これが階級対立であ

り、この対立は一九世紀後半から二〇世紀における政治の基本的な枠組みでもあった。

工業化の初期において、労働者の多くは農村から都市へ家族単位で移住してきた人々か、相対的に貧しい国から工業化の進んだ国に移住してきた人々であった。そして、工業化が他の国に先駆けて進展したイギリスでは、労働需要の増加にもなっており、一九世紀後半になると男性のみならず、多くの女性や子どもも工場で雇用されて働いていた。「共働き」といえば共働きなのだが、労働条件は多くの場合劣悪で、お世辞にも余裕のある暮らしとはいえなかった。病気や怪我をしても、失業しても、保障らしい保障は整備されていなかった。

その後、工業化の恩恵が労働者にもある程度いき届くようになった。そのきっかけは国によって様々だ。労働者自身が労働運動を組織して資本家・経営者に対抗し、協議や紛争を通じて賃金や労働条件についての権利を獲得していった面もあるが、特に戦前において「国を強くする」という目的のもと、政府が社会保障制度をジユウ実させたこと、民主主義の成熟にもなっており、政府を経由した富の再分配がなされるようになったことも大きい。特に第二次世界大戦後の経済成長を背景に、先進国は豊かさや平等の両方を追求し、一九六〇年代まではある程度それを実現できていた。

工場やオフィスで働く

工業化は、直接に製品をつくる会社のみならず、工場で生産された大量の物資を流通したり販売したりするための会社を生み出し、会社はそういった業務に対応した数多くの「仕事」、特にオフィスワークをつくり出す。現在の日本では、工場で働く人よりも圧倒的にオフィスで働く人のほうが多い。また社会保障制度のジユウ実とは、政府に雇用された人が増えるということの意味する。政府に雇用された人、つまり公務員の割合は、日本ではかなり少ないが（二〇〇八年時点で労働人口の七％程度）、高福祉で知られるスウェーデンでは四人に一人以上が公務員である。生産性が上がれば上がるほど、そして政府の役割が大きくなればなるほど、実際の生産の現場ではなく、オフィスでの事務作業あるいは対人サービスに携わる人の割合が増えることになった。

さて、工業化の結果、「仕事」は現在の私たちが想像するようなものになった。自宅を出て、電車やバスを乗り継いで職場、

すなわち工場やオフィスにトウ着する。自分の仕事をこなし、時間になったら自宅に戻って休む。報酬は金銭、つまり賃金である。この働き方のスタイルは、農家や自営業とはかなり異なっている。何しろ労働時間がある程度決められているし、職務内容もある程度は決められたものであり、勤務時間中は自由に行動することが難しくなる。

とはいえ、農家や自営業は、戦後においても先進国から消えてしまったわけではない。特に工業化が欧米と比べて遅かった日本では、戦後社会においても農業や自営業が健在であった。その後の高度経済成長期においても、政府の保護政策もあって、他の先進国と比べて日本には農業と自営業の層の厚みがあった。都市の自営業や小規模企業は、現在でも日本経済の少なくない部分を占めている。農業や自営業の世帯では、いわゆるサラリーマン世帯とは異なった働き方がなされている。たいていは職任が近接しており、サラリーマンに比べて仕事の時間を柔軟に自分で決められる余地が大きい。

家族生活の変化

では、工業化により家族あるいは家族生活はどのように変化したのだろうか。

D

工業化にともなって雇用された労働者が増え、家族のメンバーの多くが工場で働くようになると、家庭の生活レベルが落ちることになった。というのは、働く場所と住居が別の場所になり、家庭生活の時間が限られるからである。これに対して工場やオフィスを所有・経営する資本家は、工場からやや離れた環境のよい場所に住宅を構え、そこから男性（夫）のみが通勤し、女性（妻）が家セイ婦を雇用して家庭生活の質を維持するという生活スタイルを確立していった。

労働者階級の私生活の劣悪さは、人道主義的な労働運動家や組織されつつあった労働者の団体にとっても取り組むべき社会問題であったが、国全体の力を損ねてしまうおそれもあり、国のエリート層にとっても無視できない問題であった。こうして各国で工場法（現在の労働法を想像してもらってもいいだろう）が制定され、女性と子どもの工場での労働は制限されることになっ

た。同時に、雇用された成人男性は、家族を扶養するに足る賃金水準（生活給）を経営者に要求するようになった。このようななかば **E** の結果として、女性が賃労働から排除されていくのである。「男は家から離れた職場で賃労働をし、女は家庭のことに責任を持つ」という性別分業体制が労働者階級にも徐々に広がってゆき、第二次世界大戦後にはそういった生活スタイルが各国で一般化することになった。

戦後、経済が順調に成長するなかで、労働者階級の生活レベルが徐々に上昇した。高い教育レベルを持ち、オフィスで働いて比較的余裕のある生活を送る労働者も増え、いわゆる中流の厚い層を形成した。そして戦後からしばらくは、先進国の女性の多くは専業主婦になった。国によって性別分業が最も進展した時期にはズレがあるし、また国内での社会階層による違いは無視できないものの、基本的に戦後の先進国は「男性稼ぎ手」夫婦が目立つ社会であった。

と、ここまでは多くの国が共通して経験した変化である。しかし一九七〇年代、戦後の世界経済秩序を支えた体制を変更するニクソン・ショック^オ、ゲン油価格の高騰を招いたオイル・ショックを機に、そして何よりも産業が工業からサービス業に移行するポスト工業化という社会変化を背景に、先進国のあいだでも国のかたちの多様性が目立つようになる。「アメリカのような格差をともなった低福祉国家とスウェーデンのような格差の小さい高福祉国家」、あるいは「アメリカやスウェーデンのように男性も女性も活発に賃金を稼ぐ国と、日本やドイツ、イタリアのように女性は男性ほどには稼がない国」といった「国のかたち」がより明確になってくるのは、この時期以降である。

女性の労働参加率の差

では、いよいよ、現在の各国の特性についてデータを通して見ることにしよう。

本書で用いるデータは、OECD（経済協力開発機構）、ILO（国際労働機関）、世界銀行といった国際組織が公開しているデータ、そして「国際社会調査プログラム」などの国際比較データである。

国ごとの労働の違いを表す最も単純な数値は、労働力参加率である。これは、現在所得をともなう仕事をしている人（就業者）と求職している人（失業者）、つまり労働力人口が、生産年齢人口（通常は一五歳から六四歳までの全人口）に占める割合

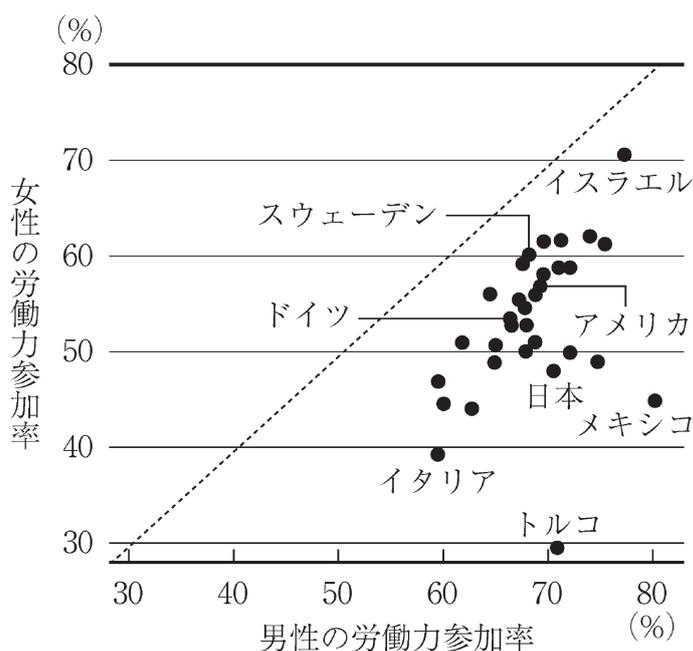


図1 男性と女性の労働力参加率 (2012年)
(データ：世界銀行WD I より筆者作成)

を表す。労働力人口（就業者と失業者）以外の人々の数が非労働力人口になるが、これには教育を受けている人（学生）、もっぱら家事労働をしている人（主婦あるいは主夫）、引退した人、病気・怪我・障害などの理由で働きたくても働くことができない人が含まれる。

図1は、横軸に男性の労働力参加率、縦軸に女性の労働力参加率（いずれも二〇一二年のもの）をとったグラフである。このデータでは分母が一五歳以上人口であり、六五歳以上の高齢者も含まれるため、就労していない高齢者が増えると分母が大きくなって労働力参加率が落ちることに留意してほしい。

点線は四五度線で、男性と女性の労働力参加率が同じである場合、この線上に点が乗ることになる。一見してわかることは、OECDに加盟するような経済先進国においては、いずれの国でも男性の労働力参加率のほうが高いことである。たとえばイタリアでは、男性の労働力参加率は六〇%弱である。もし女性の労働力参加率が男性と同じならば、イタリアを表す点はもつとずっと上（縦軸の六〇%近辺）に位置していなければならないが、現状は縦軸の四〇%近辺に位置している。このように、点から垂直に点線の位置まで上に伸ばした線の長さが、その国での男女の労働力参加率の違いを表している。スウェーデン、アメリカ、ドイツ、日本は、男性の労働力参加率は七〇%程度であるが、女性の労働力参加率についてはまちまちである。

このデータを見るかぎり、日本の女性は（イタリアやトルコほどではないが）あまり就労していない、ということになる。世間の人々のイメージどおり、といったところだろうか。

問1 傍線部Aについて、著者が考える「個体特性」の例として、最も適切なものを次から選べ。

1

- ① 日本では経済成長が停滞している
- ② 日本では都心部に屋上緑化された建物が多い
- ③ 日本には様々な社会保障制度が用意されている
- ④ 日本は山が多く、でこぼこしている
- ⑤ 日本には高齢者が多い

問2 空欄Bに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

2

- ① 環境汚染を引き起こすことになるため
- ② 資本家への富の集中をもたらすため
- ③ 取引市場の整備をもたらすため
- ④ 労働運動を引き起こすことになるため
- ⑤ 生産力の飛躍的な上昇をもたらすため

問3 傍線部Cの説明として、最も適切なものを次から選べ。

3

- ① 工業化によって農業や自営業では職住が近接するようになり、仕事の時間の柔軟性も高くなった
- ② サラリーマンが仕事の時間を柔軟に決められるようになったのは、工業化の結果である
- ③ 工業化によって様々な社会保障制度が用意され、政府に雇用された人が増えた
- ④ サラリーマンの働き方が確立したことに起因して工業化が進展した
- ⑤ 工業化によって工場やオフィスで働く人が増加し、決まった労働時間、労働内容で働くようになった

問4 空欄Dには次の4つの文章が入る。その順番として最も適切なものを次から選べ。

4

a.. 職務内容がはっきり決まっていないことを「無限定性」と呼べば、実はこの無限定性は日本企業での働き方の特徴でもある。この点については本書の別の章で再び触れる。

b.. また、ゆるやかな役割分担はあったが、誰がどの「職務」を行うのかが明確に決まっていたわけではない。

c.. 農家あるいは自営業が支配的だった時代には、家族のメンバーは基本的に何らかのかたちで「仕事」をしていた。

d.. 金銭を得るための仕事と、そうではない仕事（家事労働）の境界線は、労働者世帯ほどはつきりとしなかった。

① b ↓ a ↓ c ↓ d

② c ↓ d ↓ b ↓ a

③ a ↓ b ↓ d ↓ c

④ c ↓ a ↓ b ↓ d

⑤ b ↓ d ↓ a ↓ c

問5 空欄Eに入る言葉として、最も適切なものを次から選べ。

5

① 人道的な配慮

② 不当な平等

③ 無秩序な自由

④ 工場側の都合

⑤ 法秩序からの逸脱

問6 図1の説明として、最も適切なものを次から選べ。

6

- ① ドイツの男性の労働力参加率は、アメリカの男性の労働力参加率よりも高い
- ② スウェーデンの女性の労働力参加率は、トルコの女性の労働力参加率の約二倍である
- ③ イスラエルの女性の労働力参加率と、メキシコの女性の労働力参加率とはほぼ同じである
- ④ メキシコの男性の労働力参加率は、日本の男性の労働力参加率の約二倍である
- ⑤ イタリアの女性の労働力参加率は、日本の女性の労働力参加率よりも高い

問7 傍線部Fはどうか。最も適切なものを次から選べ。

7

- ① 労働力参加率が低い場合であっても、生産年齢人口が労働力人口に占める割合はそれほど低くない場合があることに留意してほしいということ
- ② 労働力参加率が低い場合であっても、労働力人口に六五歳以上の高齢者が含まれていない場合があることに留意してほしいということ
- ③ 労働力参加率が低い場合であっても、生産年齢人口に対する労働力人口の割合はそれほど低くない場合があることに留意してほしいということ
- ④ 労働力参加率が低い場合であっても、分子に就労していない六五歳以上の高齢者が含まれている場合があることに留意してほしいということ
- ⑤ 労働力参加率が低い場合であっても、分子に非労働力人口が含まれている場合があることに留意してほしいということ

問8 本文の内容に合致するものとして、最も適切なものを次から選べ。

8

- ① 性別分業が進展した時期には地域によってズレがあるものの、日本に特有の傾向として、戦後、女性の多くは専業主婦になり「男性稼ぎ手」夫婦が目立つようになった
- ② 産業革命を機に各国で急速に進んだ工業化は市場の発達とともに進展したが、当時は現在とは異なり、富を平等にいきわたらせることと、環境汚染を抑制することの二点は市場に任せておいては達成されない社会的課題であった
- ③ 工業化は大量の製品を生み出し、物資の流通会社や販売会社の業務に対応したオフィスワークをつくり出し、さらに労働者の生活レベルや、資本家の生活スタイルにも影響を及ぼした
- ④ 工業化の初期においては労働条件が劣悪な国もあったが、その後には労働者が工業化の恩恵を受けるようになったきっかけは各国に共通であり、それは労働者自身が組織した労働運動である
- ⑤ 工業化による経済格差はエリート層にとって特に問題ではなかったが、労働者にとって劣悪な私生活は大問題であり、人道主義的な労働運動家や労働者団体がこの問題に取り組んだ

問9 文中の二重傍線部⑦から⑭のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを、次から選べ。

- | | | | | | | | |
|----|---|---|------------|---|-----------|---|-------------|
| 9 | ア | ① | コウ 水警報の発令 | ② | コウ 私を混同する | ③ | コウ 奮して話す |
| | | ④ | 選挙に立コウ 補する | ⑤ | 難コウ 不落の城 | | |
| 10 | イ | ① | 道路がジユウ 滞する | ② | 拳ジユウ を撃つ | ③ | 目がジユウ 血する |
| | | ④ | 命令に服ジユウ する | ⑤ | ジユウ 圧を感じる | | |
| 11 | ウ | ① | 伝トウ を守る | ② | 会社がトウ 産する | ③ | ライトを点トウ させる |
| | | ④ | 食品を冷トウ する | ⑤ | 客が殺トウ する | | |
| 12 | エ | ① | 余セイ を過ごす | ② | 部屋をセイ 掃する | ③ | 機械をセイ 御する |
| | | ④ | 荷物をセイ 理する | ⑤ | 財セイ を立て直す | | |
| 13 | オ | ① | 草ゲン を歩く | ② | ゲン 気がいい | ③ | 震ゲン 地が近い |
| | | ④ | ゲン 想を抱く | ⑤ | 助ゲン する | | |

第二問 左は、根本彰『アーカイブの思想』の一節である（ただし、一部改変した）。これを読んで、後の問いに答えよ。

ユーグの読書論

ロゴス^{〔注1〕}を交換するのは共同体におけるもつとも基本的なコミュニケーション行為ですが、共同体の規模が拡大し他者とやりとりをしなくてはならなくなる場合や、共同体で確認されたロゴスが世代を超えて共有されるために、ロゴスを共有し保持するためのさまざまな仕掛けが施されます。そのなかで重要だったのは、他者と対話しロゴスを豊かにするための対話術であり、徳を積むためにロゴスを鍛えるスキルであるパイディア^{〔注2〕}であり、ロゴスを自分自身のためあるいは共同体のために保持する記憶術です。書くという行為は話し言葉を保持するための工夫として生み出されたと考えられますが、ある時期からはロゴスを保持することそのものを目的として書くことが始まります。そして、製紙技術の伝播^{〔注3〕}と活版印刷術の発明は、ロゴスの保持と拡張を決定的なものにしました。この間に行われた工夫の数々を見ておきます。

中世が終わろうとしている1128年前後のことです。パリのセーヌ河畔にあったサン＝ヴィクトル修道院のユーグ（Hugh de Saint Victor）が『学習論 *Didascalicon*』という書物を著^{〔注4〕}しました。その議論に従って、読書がどのように西洋近代をくり出すのに関わったのかについて見ておきましょう。ここでの記述はイヴァン・イリイチ『テクストのぶどう畑で』^{〔注5〕}に基づくものです。イリイチはウィーン生まれ、ラテンアメリカをキョ点^{〔注6〕}に活動した文明批評家で『脱学校の社会』（1971）『シヤドウ・ワーク』（1981）等の西洋社会や近代化を相対化する視点をもった著作で知られています。

ユーグの『学習論』の副題は“De studio legendi”となっています。イリイチは、これを読書の学習と解します。studioは研究とか学問所という意味ではなくて学習のことであり、読むこと（legere）によって学ぶことがこの学習論の中心的テーマになります。

イリイチは、この書物が今^Aという近代的な自己意識が生まれたことを示しているといい、ユーグの主張に書物を読むにあたって^B必要ないくつかのコミュニケーション的^A行為の変化がみてとれることを指摘します。この書物で学習というのは、書き言葉を

自律して生み出す方法を説くものでした。これ以前に書物は、声に出して読むものでした。もともと書物は誰かが語ったことを筆写したものであり、読むとはそれを声に出して再現することです。アルファベットは音素文字ですから、口や舌の動きと対応しています。聞いたものを文字化したり、逆に書かれたものを音として再現することは比較的容易です。したがって、書物に書かれた文字は話し言葉がそのまま記号化された文字の連なりでしかありませんでした。このことは日本語を読むときの難しさと対照的です。

古代ギリシアにおいて、文字による記録が行われる以前に記憶を助けるのは詩人の役割でした。後に吟遊詩人と訳されることになるラプソドス *Ραψωδός* は、過去の言葉の切れ端をとり合わせる人という意味からきており、ホメロスがそうであったように、熟考したり吟味したりすることなく、手にするたてごと豎琴に駆り立てられて、言葉をどんどん紡ぐことができました。またその時代重視されていた弁論術とは、演説者が、公衆の面前で行う発話のために、文章を暗記するのみならず議論展開の論理と隠喩も暗記するものでした。書くことが始まって最初はどうした記憶を助けるための手段でした。演説用の原稿として書かれたものは展開や強調点についてのメモ書きのようなものでした。また、詩人や演説者の言葉がそれを聞いた人によってそのまま書き言葉として記されます。読む際にはそのまま再現されたわけです。再現される際には言葉を噛みしめ、身体でそれを感じる事が行われます。それは最初の話者が発した言葉の作用を読書という行為を通して身体で受け止めたからです。このように書き言葉は話し言葉を伝える道具でした。そしてその状態が千年以上も続いていましたが、ユークの時代になつてはつきりと書き言葉が記憶のための道具として独立した位置づけをもつようになります。

それを示すのは、黙読への転換という事象です。黙読そのものはそれ以前にもあったのですが、例外的なものでした。話し手の発話を再現するための読書であったものが、読み手がいったん自分の頭で受け止め検討するようになります。また、自分が口述したものを筆記させ、それをもとにして考えることを奨励します。こうしたことは現在では当たり前のことですが、この頃に始まったものなのです。イリイチはここに、「ひとつの人格として誕生する自我と、書物から誕生する「いわゆる」テクストとの間に認められる特別な一致」を見いだします。ユークは書物の巡礼の旅の目的が天国ではなく、「至高の善の形相」^{正し}にある

と述べ、読書する人は「眼前におのれの自我を見いだす光へ向かって進んでいるのだ」と述べます。そして「へ汝自身を識るために *ut agnoscat seipsum*」自我を確立するために、おのれ自身をページから放シヤされる光にさらすように」と説いたのです。それ以前の読書が言葉の再現にあったのだとすれば、ユーグの言う読書は、言葉によって読み手が自らの観念の世界を作り上げることを目的とするものに転換したのです。

ユーグは、書物を記憶の道具とするための様々な工夫を提案します。以前の書物が、D1 であったとしたら、これをD2 に分断し、それを集合体として再構成するような編集作業が加えられます。それに伴いD3 という概念が明確になり、段落と段落との関係が見えやすくなります。また以前から、写本は読んだ人によってD4 に注釈が加えられた形で残されることが珍しくなかったのですが、そうした注釈が別に割り付けられて、テキストである本文に従属して明確に位置づけられるようになります。個人的な注釈が注釈書として一人歩きすることが始まります。この時代の記憶術としては、ほかにも章に分け、それぞれにタイトルを付し目次を用意することで、素早く必要なところに移動することが可能になりました。重要な言葉をチユウ出してアルファベット順の索引をつくったりということが行われます。また、著作者と編者、批評家、写本者の役割分担が起こるとか、羊皮紙製作の技術向上により聖書を一卷の書物にまとめて持ち運びできるようにするとか、版面の割り付けや挿絵を入れるといった今日の版本で一般的になったものは、この時代に始まります。

イリイチが強調するのはこうしたことが、活版印刷術が導入された15世紀以降に生じたのではなく、手書きの写本であるにもかかわらず、12世紀のユーグの時代に生じたということです。彼はその理由について明確には述べていませんが、中世についての研究が進んできた今日なら、修道院では写字室で組織的な写本が製作されていたことや、トレドやパレルモ経由でヘレニズムやイスラム文化が翻訳されて入ってきた影響とか、すでに始まっていた大学を設置する動きなどと関連付けて議論することができるとでしょう。あるいは、活版印刷術が「発明」されるのはそうした知的な準備がなされたからだということも可能だと思われるます。ユーグの学習論は、すでにこの時期から書物の読み方や作り方を通して近代的な認識を獲得する方法が始まっていることを示しています。

記憶術とは何か

中世において「記憶術 *mnemonics*」という言葉がありました。この言葉は記憶の女神ムネモシユネからきているものです。

話し言葉が中心であった古代から中世を経て近代初期のルネサンスからバロックと呼ばれる時代に、記憶術と総括されるような一連の知的な仕組みへの取り組みが盛んになりました。とくに組織的な写本作成が行われるようになってくると、書物による

E1

の工夫が現れます。ユーグが行っていたように、

E2

の代替物だった文字の長い連なりに切れ目を入れ

語と語を区別し、さらに句読点を入れることで文を切り離します。文が集まって段落や節、章を構成し、章が集まって巻を構成するというような構造が明確になります。また、ページ概念を明確にして版面の文字や文、段落の割り付けを行うことや挿絵を入れること、標題紙と呼ばれる最初のページに表題や著者などを明記すること、そして目次や索引をつけることなど、今日の印刷物出版における慣行となっていることが導入されます。これらは E3 を E4 として参照利用するための方法であり、記憶を外部に置くための工夫という意味で、記憶術の究極の姿となったわけです。先に議論した紙の書物の利点は、この時代に大方は実現しているものです。

中世から近代初期の記憶術を研究したメアリー・カラザースは記憶術という記憶のモデルとして3つのタイプがあったことを述べています。一つは「記憶Ⅱ 蠟引きモデル」です。蠟引きとは古代から用いられている筆記具で、木の板に柔らかい蠟を塗ってそこに尖筆せんびつを当てて書き付けるものです。記憶が頭のどこかの場所 (*locus*) に刻まれしまわれるものととらえたものです。

蠟は

F

がある材質ですから、何度も書き換えられることが特徴であって、記憶が消えたり変容したりすることを表

しています。これが羊皮紙なり紙に固定し保存できれば記憶が固定されることとなります。第二に「記憶Ⅱ 貯蔵室モデル」です。貯蔵室にはラベルがついたものが置かれ、使われるのを待っているというもので、記憶はあらゆる経験的知識の在庫目録として設計されている、という考え方です。第三のモデルは「記憶Ⅱ 箱」です。この場合の箱は収納箱でもあり、建物のような函はこでもあり、ノアの箱舟のようなものも含む、必要なものが取り出せるものことです。貯蔵室が固定的であるのに対して、こちらは移動可能で必要に応じて取り出せるものとされます。サン・ヴィクトル修道院のユーグが『学習論』のなかで、ひとりひとりの

学習者は心のなかに英知の収納箱をもつが、これは教会であり図書館でもあると述べ、さらに聖書というかたちで実現できているとしているのがそれを典型的に表しています。

イリイチは、別の著書『ABC——民衆の知性のアルファベット化』において、中世に書物としての聖書がどのような変[⊕]セ[⊕]ンを遂げたかを記述しました。キリスト教が始まって最初の千年の間、教徒は神の啓示の言葉を直接聖職者から発せられる言葉として聞く以外に、間接的に神の言葉を識る方法はありませんでした。しかしながら、時代とともにさまざまな工夫^Gがされてきました。5世紀の聖アウグスチヌスは著書『神の国』で、聖書を理解する助けとして梗概^{こうがい} breuius を作成することを述べています。カシオドルスは6世紀に聖書の本文からキーワードをチュウ出して、欄外にその注解を書きました。しかしながら、聖書の章を分けて個別に参照できるようになるのは12世紀になってからであり、12世紀末には聖書全体の事項索引がつけられたということです。

1230年にサン＝シエール修道院のユーグ (Hugo, or Hugues, de Saint-Cher) がつくったものが最初の聖書のコンコードクスということになっています。コンコードクスとは調和という意味ですが、聖書の全文からキーワードによって部分を参照できるようにしたレファレンス書です。部分的な言葉にも、神がつくった調和的な世界が反映していることを調べるためのツールといった意味合いがあります。聖職者にとって、必要なときに必要な神の言葉を引き出せるコンコードクスが便利なツールだったことは確かです。ただしイリイチが西洋近代を再点検する作業の一環としてそれを取り上げたように、近代的なパイディアを考えるにあたって、神の言葉が分析的ないし批判的に取り扱われる^オケイ機^オにもなったと考えることができるでしょう。

このあとで、人文主義や啓蒙主義^{けいもう}のなかにこうした学習論的な視点が含まれていたことを述べます。文化史家アンソニー・グラフトンは、過去、人文主義が単一のもので非実用主義的なものだったという見方が支配的だったのは、フランシス・ベーコンやルネ・デカルトなどの「新哲学」の推進者たちが、人文主義が文献に基づく古い方法であると批判することで自らを正当化したことの影響であると述べています。人文主義はきわめて多様な内容を含み、また、きわめて実用主義的な側面をもっていたということができません。アーカイブの思想はまさにこの人文主義の実用的側面から生まれたことを見ていきたいと思います。

〔注〕

1 ロゴス——言語、論理、法則、理性などを意味する多義的な言葉

2 パイディア——本性を覚醒させ、本来の方向に向けかえ、真の認識に慣らす過程。転じて、広く教育、教養をいう

3 テキスト——テキストと同じ、文章や文献のひとつを指して呼ぶ呼称

4 形相——ある事象を他のものと区別させ、それを存在させるのに不可欠な事象の本質的な存在構造

5 写本——手書きで書き写した本

6 尖筆——先のがった棒状の筆記用具。インクを使わず、押し当てることで筆記する

問1 傍線部Aにおける「近代的な自己意識」の例として、最も適切なものを次から選べ。

14

① まわりの人が音読をしても、例外的に黙読をし続けようとする意識

② 詩人によって紡がれた様々な言葉に対して素直に共感できる意識

③ 読書を通して自分の頭の中で考え、自分の考え方を持つことを大切にする意識

④ 公衆の面前で論理的な議論ができるよう、論理や隠喩といった技法を大切にする意識

⑤ 確たる自己を持つため、誰よりも魅力的な言葉を紡ぐ技術を日々磨こうとする意識

問2 傍線部Bについて、その変化の例として、最も適切なものを次から選べ。

15

① 書物を読む際、声を出して読むことから黙読することへの変化

② 書物を読む際、詩人に依頼することから演説者に依頼することへの変化

③ 書物を読む際、詩人のように韻律をつけることから展開や強調点を意識することへの変化

④ 書物を読む際、詩人のように暗記することから展開を記したメモ書きを見ることがへの変化

⑤ 書物を読む際、文章を自分なりに解釈しながら黙読することから話し言葉を想像しながら黙読することへの変化

問3 傍線部Cにおける「詩人の役割」の説明として、最も適切なものを次から選べ。

16

① 様々な詩人の詩を集めて新しい詩を書き言葉として残していた

② 詩だけでなく、議論展開の論理を書き言葉として残していた

③ 詩を聞いた聴衆たちに聞いた通りに書きとらせる方法を教えていた

④ 誰もがその書物を読めば声に出せるように、音素文字を発明し普及させた

⑤ 過去に話された様々な言葉を、詩として伴奏に合わせて声に出し継承していた

問4 空欄D1からD4に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

17

D 1

D 2

D 3

D 4

① 発した言葉の連なり 行間や本文の欄外

ページ

段落

② 発した言葉の連なり 段落

行間や本文の欄外

ページ

③ 発した言葉の連なり 段落

ページ

行間や本文の欄外

④ ページ 段落

行間や本文の欄外

発した言葉の連なり

⑤ ページ 発した言葉の連なり

段落

行間や本文の欄外

問5 空欄E1からE4に入る語の組み合わせとして、最も適切なものを次から選べ。

18

E 1

E 2

E 3

E 4

① 書き言葉 話し言葉 記憶術 書き言葉

② 書き言葉 記憶術 話し言葉 話し言葉

③ 記憶術 話し言葉 書き言葉 書き言葉

④ 記憶術 書き言葉 話し言葉 書き言葉

⑤ 記憶術 話し言葉 記憶術 話し言葉

問6 空欄Fに入る言葉について、最も適切なものを次から選べ。

19

- ① 可塑性
- ② 不可逆性
- ③ 脆弱性^{ぜいじ}
- ④ 透過性
- ⑤ 揮発性

問7 傍線部Gについて、「さまざまな工夫」の例として、最も適切なものを次から選べ。

20

- ① イリイチの一連の著作によって、キリスト教徒たちは神の言葉を直接知ることができるようになったこと
- ② カシオドルスの注解によって聖書の章は分けられ、個別に参照できるようになったこと
- ③ サン＝シエール修道院のユークはコンコードダンスを通して、神の言葉を分析し、宗教に対する批判を始められるようになったこと

- ④ サン＝シエール修道院のユークのコンコードダンスによって、他の聖職者たちは神の言葉をキーワードを通して調べやすくなったこと

- ⑤ 聖アウグスチヌスが、聖書の理解を助けるため聖書全体の事項索引を完成させたこと

問8 本文の内容に合致するものとして、最も適切なものを次から選べ。

21

- ① サン＝ヴィクトル修道院のユークは神から自律した確たる自己を持つ個人を生み出すために『学習論』を書いた
- ② 音読から黙読への転換は活版印刷術によるのではなく、手書きの時代に生じていた
- ③ 日本語は音素文字を用いないため、古代ギリシアとは独立の文化を確立するに至った
- ④ サン＝ヴィクトル修道院のユークは記憶術と呼ばれる知的な仕組みを確立するために、三つの記憶モデルを生み出した
- ⑤ 製紙技術と活版印刷術が普及するまでは、人びとは蠟の板に文字を書きつけることで記録をしていた

問9 文中の二重傍線部⑦から⑩のカタカナ部分と同じ漢字を用いるものを、次から選べ。

- | | | | |
|--------------|------------------|---------------|-----------------|
| 22 | ⑦ — ① 代表に推キヨ される | ② キヨ 実入り混じった話 | ③ 年老いて隠キヨ する |
| ④ 要求をキヨ 絶する | ⑤ ビルを占キヨ する | | |
| 23 | ① — ① 土シヤ が崩れる | ② シヤ 札金を渡す | ③ 優勝のシヤ 程圈内 |
| ④ 傾シヤ のある道 | ⑤ 光をシヤ 断する | | |
| 24 | ① — ① チユウ 象的な表現 | ② 他人をチユウ 傷する | ③ 全精力を傾チユウ する |
| ④ チユウ 義心がある人 | ⑤ 軍隊が戦地にチユウ 留する | | |
| 25 | ① — ① 奈良にセ ん都する | ② セ ん載一遇のチャンス | ③ 民主化運動がセ ん鋭化する |
| ④ 伏セ んを張る | ⑤ 新聞を使ってセ ん伝する | | |
| 26 | ① — ① ケイ 統立てて話す | ② ケイ 歴をいつわる | ③ 畏ケイ の念を抱く |
| ④ 自己ケイ 発書を買う | ⑤ 賃貸物件のケイ 約を結ぶ | | |